

梅園学から万里学へ

高橋正和

第一章 序 論

此の論文の中心的な資料は、今から十数年前に、大分県は杵築市にある杵築公民館の倉庫の中から、私が偶然に見つけたところの『窮理通』（一卷本窮理通と命名）の写本である。

此の書物の存在を伺わせる最も古くして確実なる証拠は、「天保七年（一八三六）丙申春三月」の日付の記されている帆足万里（一七七八—一八五二）の名著『窮理通』の「自序」である。万里はその中で次の様に記している。

予ノ壮ナリシ時、『窮理通』数万言ヲ著ハセリ。蘭室先生、為ニ序ヲ作りシ所ナリ。已ニシテ、其ノ多紙ナルヲ以テ之ヲ毀チタリ。四十余ニシテ西藉ヲ得テ之ヲ読ムモ、寒郷、師ナキニ苦シミタリ。唯ダ訳語ニ就キテ搜索シ、意倦メバ則チ止ム。六・七年ヲ積ミテ、稍ヤ其ノ義ニ通ズルコトヲ得タリ。（原漢文）

ところが、私が発見した『窮理通』の写本は一卷本で、その字数は大略二万四千余字であるから、「予ノ壮ナリシ時、『窮理通』数万言ヲ著ハセリ」の一節にいわゆる「数万言」とはほぼ量的に一致する。

ついでに付言すれば、「四十余ニシテ西藉ヲ得テ之ヲ」読みし結果成立した作品は、私が今から十六年前に「財団法人・私学研修福祉会」の助成で出版した『稿本窮理通の研究』の中で紹介したところの、いわゆる『稿本窮理通』である。

大正十五年に帆足記念図書館から公刊された『帆足万里全集』（上下二巻）の上巻に収録されている『窮理通』は、これらの稿本類が推稿された結果完成したものである。

此の書物の存在を伺わせるに足るところの第二に古いと思われる証拠は、西村天囚が明治四十四年一月に世に問うた名著『学界乃偉人』の「帆足万里」の章の中に認められる。次の一節がそれである。

洞仙は梅園の別号なり。然れども亦た（万里は）梅園の学説を評して言へるあり。蓋し、（梅園）先生の理を析つは、推歩の深きも、未だ究めざるありと。是に於て、万里は梅園に継ぎて其の学を大成せんことを期し、三十余の時に『窮理通』数万言の著に着手して、其の師・愚山の生前に脱稿せり。愚山の死は万里三十七の時なり。愚山、之が為に『窮理通』に序して、「姑く是に似て真に近き者に従ふ可なり」と云へり。未だ輒ち許可せざるの意を見る、其の窮理や人をして首肯せしむる能はざる者ありしか。既にして万里も亦た自ら其の紕繆多きを知りて之を毀棄せり。亦た梅園の『玄語』旧稿を棄去りしに似たり。

読者は、此の証拠の中の、

。三十余の時に『窮理通』数万言の著に着手……。

。万里も亦た自ら其（初稿『窮理通』）の紕繆多きを知りて之を毀棄せり。

という二つの事実を記憶しておいていただきたい。

此の書物の存在を伺わせるに足るところの第三に古いと思われる証拠は、日本科学史学会が昭和十八年の十一月に刊行した『科学史研究』（第七号）に収載されている矢島祐利先生の玉論「本邦に於ける窮理学の成立」の中に認められる。次の一節がそれである。

（蘭室の序文の中で、蘭室は万里の『窮理通』を評して——筆者注）「姑く是に似て真に近き者に従ふ（ことは）可なり」といふのであるから、（此の『一卷本窮理通』に対して、師匠の蘭室は——筆者注）全腹の賛意を表した

ものではないことが知られる。こゝに於て、更に研鑽を重ねた。此の初稿『窮理通』(『一卷本窮理通』のこと——筆者注)は如何なるものか、今日知ることを得ないが、恐らく梅園の系統に立つ条理の学であつたと思われる。

読者は此の証拠の中の、

。此の初稿『窮理通』は如何なるものか、今日知ることを得ない……。

という時代的事実と、

。恐らく梅園の系統に立つ条理の学であつたと思われる。

という推断を記憶しておいていただきたい。

此の書物の存在を伺わせる第四の証拠は、社会思想社が昭和四十四年八月に「現代教養文庫」の中の一冊として刊行した『江戸の科学者たち』(吉田光邦・京都大学人文科学研究所教授)の中に認められる。次の一節がそれである。

彼(万里)は門人の教育にあたるとともに、大著『窮理通』を書きはじめた。その完成は天保七年ごろとされる。

彼はそれ以前にも『窮理通』という題のものを書いた。それは尊敬する梅園の「条理」の学問を、さらに一歩進めようとしたものだった。この書は文化七年(一八一〇)に出来上がり、師の脇愚山が序文を書いた。けれども今日、この書は伝わっていない。

読者は、此の証拠の中の、

。今日、この書は伝わっていない。

という断定的結論を記憶しておいていただきたい。

此の書物の存在を伺わせる第五の証拠は、中央公論社が昭和四十七年六月に刊行した『徳川合理思想の系譜』(源

了円・現国際基督教大学大学院教授・日本思想史学会会長)の中に認められる。次の一節がそれである。

万里の自然科学上の主著は『窮理通』であり、天保六年(一八三五)、万里五十八歳のとき、稿を起こされ、翌七年に一応完成して彼はその年「自序」を書いているが、この今日残っている『窮理通』のほかに、文化七年(一八一〇)、万里三十三歳の折に出来上がり、その後、彼自身の手で反故にされた初稿『窮理通』があった。

読者は、此の証拠の中の、

。文化七年、万里三十三歳の折に出来上がり、その後、彼自身の手で反故にされた初稿『窮理通』があった。
という事実認識を記憶しておいていただきたい。

此の書物の存在を伺わせる第六の証拠は、吉川弘文館が昭和四十二年四月に刊行した人物叢書『三浦梅園』(田口正治著)の中に認められる。次の一節がそれである。

梅園門下として別に一家をなしたものが脇蘭室である。特に蘭室の功績としては、梅園の学問を、一世の大家帆足万里に伝えたことであった。万里は蘭室を中継者として梅園の志を継ぎ、渾身の努力を傾注して『窮理通』を著したのであった。

特に田口の、

万里は・・・梅園の志を継ぎ、渾身の努力を傾注して『窮理通』を著したのであった。

という一節は注目を要する。なんととなれば、これこそが当該論文に依って、その実態の一部を解明しようと志しているところの幻の名著『一卷本窮理通』の内容的特質とかかわってくるからである。

以上を序論として、以下に本論に入ろう。

先づ、『一卷本窮理通』の第一の特徴を指摘すれば、書司学的視座からのそれである。その様式は、和本袋綴にて、その大きさはほぼA五版程度、表紙を除外しての墨付き料紙五十一葉から成る。

その第二の特徴を指摘すれば、写本の執筆者は今のところ誰であるのか不明である。しかし、表紙に貼付されている縦十七・五センチ、横四・八センチの貼り題簽に大書された堂々たる風格を有する『窮理通』という三文字は万里晩年の自筆であるらしい。梅園研究の世界では『玄語図全影』の編者として有名な辛島詢士博士と大分県の郷土史家としては第一人者である大塚富吉先生の両者が、共に太鼓判を捺した万里の晩年の書体の特徴を有すると保証したからである。

その第三の特徴を指摘すれば、判明する限りでの最初の所有者は、万里の高弟の一人である佐野鶴溪であった点である。巻末に「雀溪書院藏」というサインと「雀溪」の蔵書印が捺されている事実がこれを証明する。

その第四の特徴を指摘すれば、墨付第一葉の上部欄外に「梅園文庫図書之印」という蔵書印が捺されている事実である。

第二章 本論

次に、当該論文の主題に即応する本論に入ることとする。結論から先に指摘すれば、『一卷本窮理通』の内容的な特質は、此の世界の存在と現象を、あるがまゝに客観的に記録しているところにある。

これに対して、三浦梅園の『玄語』や『贅語』に登場するところの、一見的には『一卷本窮理通』と同一の存在や

現象を記録しているやに映ずるものは、その実、梅園哲学の中核を構成する「一即一一」という数的カテゴリーで示されるところのいわゆる「条理」の正当性を証明する具体的事例として挙示されているのである。

以下に六種だけ具体例を示そう。

資料一

『一卷本窮理通』の中に次の様な一節がある。

。至二極下、一年一昼夜而止。(二極ノ下ニ至ルヤ、一年ハ一昼夜ニシテ止ム)

ところが、梅園の第二主著『贅語』の中では、

。極北之地、我春分而見日於地上。横回不暮一百八十余周。過我秋分而全不見日於地上。冥朦不曙、度我一百八十

余日。於是、極南之地、方見於地上。横回不暮二百八十余周。又、全不見日於極南之地。(極北ノ地ハ我ガ春分

ニシテ、日ヲ地上ニ見ル。横回シテ暮レザルコト一百八十余周ナリ。我ノ秋分ヲ過ルヤ、全ク日ヲ地上ニ見ズ。

冥朦トシテ曙ケザルコト我ガ一百八十余日ヲ度ル。是ニ於テ、極南ノ地モ方ニ日ヲ地上ニ見ル。横回シテ暮レザ

ルコト一百八十余周ナリ。……)

と詳しく説明した上で、

。故当二極之地者、一歳代為一昼夜。(故ニ、二極ノ地ニ当ル者ハ、一歳ニ代ルガハル一昼夜ヲ為ス)

と結論する。この際、「横回シテ暮レズ」とは南極や北極地帯にのみ生ずるあの「白夜」の現象を意味する。

ところが、梅園は「昼夜」の問題から更に「春夏秋冬」の問題へと話柄を発展させ次の様に述べる。

。故、南地春則北地秋也。南人葛則北人裘矣。自中線而南北、氣候同而反其時。(故ニ、南地ガ春ナレバ則チ北ハ秋ナリ。南人ガ葛スレバ(夏服を着れば)則チ北人ハ裘スハ冬服を着る)。中線ヨリ南北スレバ、氣候ハ同ジクシテ其ノ時ヲ反ス)

此の資料の中で梅園にとつて最も重要なのは「氣候ハ同ジクシテ其ノ時ヲ反ス」という一節である。なぜなら、「一即一一」の「一」に相当する一地球上の全一的季候それ自体が「二即一一」の「一一」的存在に相当する「春夏秋冬」という季節の到来する時期を反していると結論しているからである。

「春夏秋冬」の場合に較べて、梅園が「昼夜」を問題にした場合には、慥かに「南北の二極の地」に於いて昼夜の到来する時を「反している」とは、少くとも『贅語』の文面上には顕現してはいない。しかし、静かに且つ深く自然現象の原理を考えてみると、「一歳代為一昼夜」とは、南北の両極地に於ける「一一」的なる「昼夜」の現象も、「其の到来する時期を反している」事実を叙述していることになる。なぜなら、「二即一一」の「一一」に相当する「昼夜」の混成体が「一一」に相当する「昼夜」の彙立体に於て、互いその現象と場所と時期とを「反している」からである。

資料二

『一卷本窮理通』の中に次の様な一節がある。

。韃韃・鉄勒之地、夏月、日初没、烹羊脾、熟則天已明。羊脾易熟之物也。鉄勒、漢測北極出地、五十五度。(韃韃・鉄勒ノ地ハ、夏月ニ日ハ初メテ没スレドモ、羊脾ヲ烹ルニ、熟スレバ則チ天ハ已ニ明ラカナリ。羊脾ハ熟シ易キ物ナリ。鉄勒ハ漢ヨリ北極出地ヲ測ルコト五十五度ナレバナリ)

つまり、『一卷本窮理通』に於ては現象的事実のみを描写している。

ところが、『贅語』の中では、

。唐太宗、収至骨利幹、置堅昆都督府、其地日没而後天色正曛。煮羊脾、適熟則日已出。蓋自極北漸南則昼夜漸多。・・・日照一辺則影蔽一辺。・・・与我距一百八十余度之地者与我反昼夜。（唐ノ太宗ハ収リテ骨利幹ニ至リ、堅昆都督府ヲ置クニ、其ノ地ハ、日没シテ而ル後ニ、天色、正ニ曛レナリ。羊脾ヲ煮ルニ、適カニ熟レバ則チ日ハ已ニ出デタリ。蓋シ、極北ヨリ漸ヤク南スレバ則チ昼夜ハ漸ヤクニシテ多ケレバナリ。・・・日ノ一辺ヲ照セバ則チ影ハ一辺ヲ蔽ヘリ。・・・我ト一百八十余度ヲ距ツルノ地ハ我ト昼夜ヲ反セリ。）

と詳細に説明し、万里が話題としたものと同一の話題をあつかいながらも、梅園の方はあくまでも、それを条理哲学の正当性を証明する為の資料に供しているだけなのである。

素人にも理解し易くこれを解説すれば、「一即一」の「一」に相当する混淪たるクルクル坊主の一箇の地球上に在りながらも、観察者である「我」即ち観察主体の立脚地と百八十度を隔てたる「一一」的な場所に視座を据えている今一人の観察者である「他者」との間に於ては、その視座の立脚地が「一一」的であるが故に「反昼夜（昼夜ヲ反スル）」ということになると主張するのである。

資料三

『一卷本窮理通』の中に次の様な一節がある。

除体外、氣皆充滿。減一分体、乃有一分氣填之。故能與氣相拒以代。水滴、閉一孔、水即不入。氣滿、無出路也。倒而懸之、其出亦不多。氣不得入代。（体ヲ除クノ外、氣ハ皆ナ充滿ス。一分ノ体ヲ減ズレバ、乃ハチ一分ノ氣ノ有リテ之ヲ填ム。故ニ能ク氣ト相ヒ拒ミテ以テ代ルナリ。水滴、一孔ヲ閉ズレバ、水ハ即チ入ラズ。氣ガ滿テ、出

ル路ヲ無^ミスレバナリ。倒マニシテ之ヲ懸レバ、其ノ出ルヤ亦タ多カラズ。氣ガ入レ代ルコトヲ得ザレバナリ）
ところが、『玄語』の「本宗篇」の中では、空氣の實在に關して、

。蓋人、坐干塊洋細縊之間、觀視之弗見、聽之弗聞、触之弗礙者、或以為空、或以為無。其未知条理、認為空無、不亦宜乎。（蓋シ、人ハ塊洋細縊ノ間ニ坐シテ、之ヲ視レドモ見ヘズ、之ヲ聽ケドモ聞ヘズ、之ニ触ルレドモ礙ゲザル者ヲ觀テ、或ヒハ以テ空ト為シ、或ヒハ以テ無ト為ス。其ノ未ダ条理ヲ知ラザルモノハ認メテ空無ト為スモ亦タ宜ナラズヤ）

と述べることに依つて、「梅園哲学にいわゆる存在論の中核を形成する条理を理解しない限り、空氣の有り様を空無なりと認識するのも亦やむを得ないことである」と断定している。つまり、此の一節はあくまでも「条理」との関連の上に於て叙述している。

梅園は更に續けて、

。蓋、會易之態、反物而同居。故充与空成、無与有偶。其所謂空者空于体而不空于氣焉。其所謂無者無于質而不無于氣矣。（蓋シ、會易ノ態ハ物ヲ反シテ居ヲ同フス。故ニ、充ト空ト成リ、無ト有ト偶セリ。其ノ所謂^{いはゆ}ル空ナル者ハ体ニ空ニシテ氣ニ空ナラザルナリ。其ノ所謂^{いはゆ}ル無ナル者ハ質ニ無ニシテ氣ニ無ナラザルナリ。）

とて、「反物而同居（物ヲ反シテ居ヲ同フス）」という特性を保有する実存を、「条理數関數」と稱すべき「一即一一」の「一一」の部分に特に注目して、「會易之態」即ち実存の會易的様態のひとつの典型を「空」と「無」の条理的関連の上に於て提示する。有名な「水注」の例え話は、故に梅園学の場合のそれは万里学のそれと相い相違して、あくまでも実存のあり様が条理的である事実を証明する為の実例であるにしかすぎない。

故に、梅園は

。試觀製水注。(試ミニ水注ヲ製スルヲ觀ヨ)
と我々に命じ、次の如くに説明する。

。(水注には) 必鑿二孔。一孔通氣、一孔通水。出一勺之水、納一勺氣。水尽則氣充。氣不出則水不入。・・・水以門戸出入則氣亦以門戸出入。既已空無、豈以門戸為哉。(水注には——必ズ二孔ヲ鑿テリ。一孔ハ氣ヲ通ジ、一孔ハ水ヲ通ズ。一勺ノ水ヲ出セバ一勺ノ氣ヲ納ル。水ガ尽レバ則チ氣ガ充ツ。氣ガ出デザレバ則チ水ガ入ラズ。・・・水ハ門戸ヲ以テ出入スレバ則チ氣モ亦タ門戸ヲ以テ出入ス。既ニ已ニ空無ナレバ、豈ニ門戸ヲ以テスルコトヲバ為ンヤ)

資料四

『一卷本窮理通』の中に次の様な一節がある。

。肆上吹火銅球、一小孔内含地氣。故不受水。火爰便氣中液燥、只畜熱氣。熱吸水、故得水入。水僅得入則氣和、又拒水終不得滿中也。(肆上ノ吹火銅球ハ一小孔内ニ地氣ヲ含ム。故ニ水ヲ受ケズ。火モテ爰レバ便チ氣中ノ液ハ燥キ、只ダ熱氣ノミヲ畜フ。熱ハ水ヲ吸フ。故ニ水ノ入ルコトヲ得。水ガ僅カニ入ルコトヲ得レバ則チ氣ハ和スルモ、又、水ヲ拒ミテ終ヒニ中ヲ滿スコトヲ得ザルナリ)

ところが、『玄語』の「地冊露部」の中では、此の冊の四つのテーマ「天地・華液・日影・水燥」の中の水燥論の正当性を証明する手段として活用されている。

。日影以明暗寒熱為政。而水燥者日影之反物・・・水解為濕、燥堯為水。燥中有火猶水中有氷。皆其極也。得吹火

球弄之、一銅空丸、鑿一織孔。火之則発尽丸中之燥。投水則以発尽燥、噴水而実。投火則結質解而為風塌。(日影ハ明暗寒熱ヲ以テ政ヲ為ス。而シテ水燥ナル者ハ日影ノ反物ナリ。水ハ解ケテ湿ト為リ、燥ハ発シテ水ト為ル。燥中ニ火ヲ有スルハ猶ホ水中ニ氷ヲ有スルガゴトシ。皆、其ノ極リナリ。吹火球ヲ得テ之ヲ弄スルニ、一銅空丸ニ一織孔ヲ鑿チテ、之ヲ火ニスレバ則チ丸中ノ燥ヲ発シ尽ス。水ニ投ズレバ則チ燥ヲ発シ尽スヲ以テ水ヲ噴ヒテ実ス。火ニ投ズレバ則チ結質ガ解ケテ而シテ風ト為リテ塌ク)

資料五

『一卷本窮理通』の中に次の様な一節がある。

。『物理小識』引『格致草』曰、崇禎壬申臘月、余樓簷瓦、凍為花草獅鳳之形。又曰、固石溪中有洲。寬廠里許、周匝皆水、石山屏之、欲見沙図者、隔宿禱之其出也、鳥跡・魚文・卦列・飛符・蜃閣・海市・枯木・寒鴉無不畢具。前後見者、各出機軸、無有重復。(『物理小識』ニ『格致草』ヲ引キテ曰ク、崇禎壬申ノ臘月、余ガ樓ノ簷瓦ガ凍リテ華草ト獅鳳ノ形ヲ為ル。又曰ク、固石ノ溪中ニ洲アリ。寬ク廠フコト里許ニシテ、周匝ハ皆ナ水、石山ガ之ニ屏ス。沙図ヲ見ント欲スル者ハ宿ヲ隔テテ之ニ禱レバ、其ノ出ルヤ鳥跡・魚文・卦列・飛符・蜃閣・海市・枯木・寒鴉、畢ク具ハラザルハ無シ。前後ニ見ハルル者ハ、各々機軸ヲ出シテ重復スルコト有ル無シ)

ところが、『贅語』の「死生帙」の中では梅園哲学に於て重要な位置を与えられている「造化論」の具体例として扱われている。

。石之類佗物、是其常也。而豈止石類物哉。『物理小識』載歐陽宗衡説曰、固石距零百余里、溪中有洲。白砂平鋪、水痕能為鳥跡・魚文・卦列・飛符・蜃閣・海市・枯木・寒鴉、無不畢具。錯綜變化、前後見者、各出機軸、無有

重復。沙浪猶動物、冰亦能摸物形。『格致草』曰、崇禎壬申臘月、余樓簷瓦、凍為華草獅鳳之形。(石ノ佗物ニ類スル、是レ其ノ常ナリ。而レドモ、豈ニ止ダ石ノミ物ニ類センヤ。『物理小識』ニ歐陽宗衡ノ説ヲ載セテ曰ク、固石ハ零ヲ距ツルコト百余里ナリ。溪中ニ洲アリ。白砂平鋪シテ、水ノ痕、能ク鳥跡・魚文・卦列・飛符・蜃閣・海市・枯木・寒鴉ヲ為シテ畢ク具セザル無シ。錯綜變化スルモ、前後ニ見ハルル者ハ、各々機軸ヲ出シテ重復スルコト有ル無シ。沙浪モ猶ホ動物ノゴトシ。冰モ亦タ能ク物ノ形ヲ摸ス。『格致草』ニ曰ク、崇禎壬申ノ臘月、余ガ樓ノ簷瓦ガ凍リテ華草ト獅鳳ノ形ヲ為ル。

資料六

『一卷本窮理通』の中に次の様な一節がある。

。『物理小識』載、唐南海采珠之人、逢潮湧則下空、遇之必病。理或有之也。〔『物理小識』ニ載ス、唐ノ南海ノ珠ヲ采ルノ人(真珠を採取する海女)、潮ノ湧クニ逢ヘバ則チ下ハ空ナリ。之ニ遇フ者ハ必ズ病ムト。理トシテヒハ之レ有ラン)〕

しかるに、『物理小識』の卷二の「潮汐」の節には、

朱隱老言・・采珠者、入海底、間遇潮則水湧而下虛。潮高十丈、下所虛亦十丈。以水則虛。以氣則実。采珠者、中其氣輒病。

とあって、『一卷本窮理通』から引用挙示した「資料六」の最後の五文字「理、或有之也」は見当らない。故に、此の五文字の「理論的にあるいはそういう現象も有るのであろう」という評価のみが、あるいは万里の下したものであろう。それにしても、此の「資料六」の主流も、やはり現象の事実の描写のみである。少くとも梅園の条理哲学とは

全く無関係な内容である。

ところが、『贅語』の「死生帙」の中では梅園哲学に於て重要な位置を与えられている「水燥論」の具体例として次の様に扱われている。

。地事則水燥之摩盪・・・水開通路於川谷、燥開通路於海窖。川谷者陸中之水峽。・・・海窖者水中之氣峽。・・・
 『天経或問』採珠者、入海底、間遇潮則水湧而下虚焉。以水則虚。以氣則実。採珠者中其氣則病。物不能以一成則条理之態也。(地事ハ則チ水燥ノ摩盪ナリ。・・・水ハ通路ヲ川谷ニ開キ、燥ハ通路ヲ海窖ニ開ク。川谷ナル者ハ陸中ノ水峽ニシテ・・・海窖ナル者ハ水中ノ氣峽ナリ。・・・『天経或問』ニ採珠ノ者、海底ニ入ルニ、間マ潮ニ遇ヘバ則チ水湧キテ下虚ス。水ヲ以テスレバ則チ虚ナリ。氣ヲ以テスレバ則チ実ナリ。採珠ノ者、其ノ氣ニ中レバ則チ病ム。物ノ一ヲ以テ成ルコト能ハザルハ則チ条理ノ態ナリ)。

此の梅園の資料の中で、第一に注目すべきものは、

水開通路於川谷

燥開通路於海窖

という対句である。そして、こゝにいわゆる「水燥」とは『玄語』の「地冊露部」に収められている有名な条理語の一種であることは云うまでもない。つまり、条理数関数で説明すれば、「水」と「燥」は勿論のこと、「川谷」と「海窖」も「一一」的存在である。

故に、当面問題の焦点にある『一卷本窮理通』の中に『物理小識』から引用されている話柄は、「水」の通路としての「川谷」に対する「燥」の通路としての「海窖」に関するもののみである。つまり、「一一」的存在としての

「川谷」と「海窖」の内の後者に關する情報のみを述べただけである。

この様な万里の執筆態度に対して梅園のそれはどうかと見れば、第二に注目すべきものとして、「一一」的叙述態を採った次の様な「川谷」と「海窖」の定義の対句的存在を指摘できる。

川谷者、陸中之水岬

海窖、水平之水岬

第三に注目すべきものは、『一卷本窮理通』の方が明末清初の方以智の著書である『物理小識』から引用しているのに対して、『贅語』の方は方以智の高弟である游芸の『天経或問』から引用している点と、すでに論じた「資料三」に於ける「水注」の例え話の個所で問題になった「氣の虚実論」にかかわる情報を含有している点である。「資料の六」

以水則虚

以氣則実

という対句がそれである。

「資料六」の中で最も注目すべき梅園の主張は、最終行に認められる次の様な一節に含まれている。

。物ノ一ヲ以テ成ルコト能ハザルハ則チ条理ノ態ナリ。

そもそも梅園のいわゆる「条理ノ態」即ち「条理の様態」は「一一」的であるが故に、あらゆる存在も現象も、決して「一を以て成就すること」は不可能なのである。故に、此の「資料六」の話柄で論証すれば、万里は「一一」的存在であるべき「川谷」と「海窖」の内の、後者に関する情報のみを収載しているが、此の事実それ自体が、実は万

里が梅園の条理学を全面的・意識的には継承しなかった証拠となる。

結 論

以上の様な六種の資料をつぶさに検討することによって、私は梅園学から万里学への流れの中に、すでに略述しておいた様な新しい結論を得た。

それは、昭和十八年に矢島祐利先生が『科学史研究』第七号に於て推断した結論、即ち

此の初稿『窮理通』は如何なるものか、今日知ることを得ないが、恐らく梅園の系統に立つ条理の学であったと思われる。

という結論とはおよそ相違するものであった。

又、吉川弘文館が刊行した人物叢書の『三浦梅園』の中で田口正治先生が断定した結論、即ち

梅園門下として別に一家をなしたものが、脇蘭室である。特に蘭室の功績としては、梅園の学問を一世の大家帆足万里に伝えたことであつた。万里は蘭室を中継者として梅園の志を継ぎ、渾身の努力を傾注して『窮理通』を著したのであつた。

とする田口正治博士の結論とも、およそ相違するものであつた。つまり、万里学には梅園学の本質的中核を形成する条理哲学の要素が、万里にとっては最初の窮理学の書であつた『一卷本窮理通』に於てすら、全くと云つて良い程に欠落していた。